金沢市意匠図案研究会々報　創刊号について

1ページ目

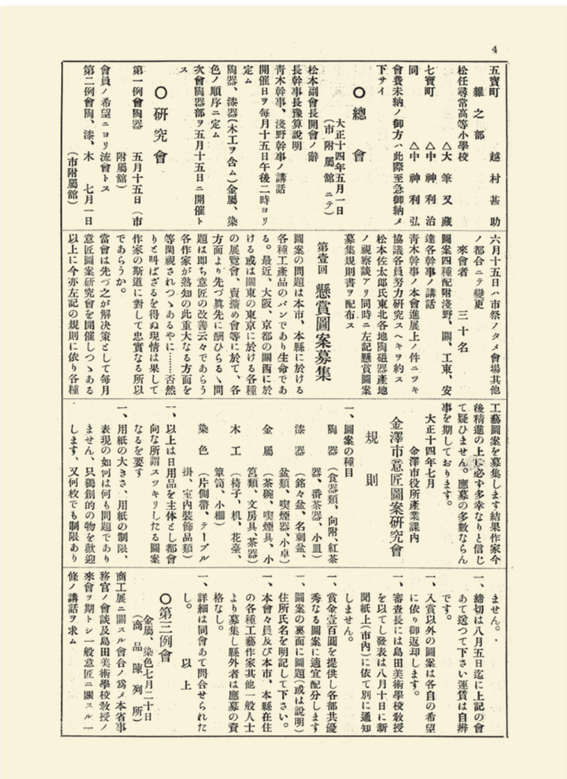
本会報は、金沢市意匠図案研究会の創刊号として、大正 14 年8月6日に発行されたものである。冒頭の挨拶文「創刊に就て」を記した会長の相良歩は当時の金沢市長であり、本紙中段の会則第二条に「本会の事務所を金沢市役所内に置く」とあることからも、行政が主導しつつ民間企業と協力して意匠図案の改良に取り組んでいた様子がうかがえる。

挨拶文の内容は次のとおりである。

「そもそも地方の発展の基盤は第一に産業の振興である。そして、産業の開発は地方特産品の発展にかかっている。金沢市には多くの特産品があるが、その形や模様はどれも似通っており、変化に乏しいことが不安である。そこで、金沢市意匠図案研究会を発足させ、意匠図案の専門家の指導を仰いで、さらなる発展を図りたい。陶磁器、漆器、金属、染物、木工など、金沢の特産品に関係する生産者ならびに販売業者を育成し、これらの産業の発展を願うものである。関係者はこのことを深く心に留め、本会の発展に全力を尽くしてもらいたい。」（「 」内の要約は筆者、以下同じ）

また、会則第七条には、研究会の具体的な活動内容として次の事項が掲げられている。

・図案の研究過程における問題点を会合にて議論すること
・学識者による講義を実施すること
・展覧会を開催すること
・意匠図案の懸賞を募集、または会報を発行すること



4ページ目

会報は1～2ページ目には、会則と役員名（会長、副会長、幹事長、幹事、編集長、編集員、顧問、名誉会員）が記載されている。続いて会員について、陶磁器の部（21 名）、漆器の部（12 名）、金属器の部（28 名）、染物の部（59 名）、木工の部（12 名）、雑の部（3 名）に分けて紹介されている。

4ページ目には、会報発行に先立って大正 14 年5月1日に開催された総会の記録と、研究会の概要が載せられている。さらに、「図案の問題は本市、本県における各種工産品のパンであり生命である。（中略）各種の展覧会、販売会等において、各方面から真っ先にやり取りされる問題は意匠の改善等であろう」という文章から始まる第1回懸賞図案の募集が掲載されている。

募集図案は、部門ごとに対象品が定められており、例えば陶器の部では「食器類、向付、紅茶器、番茶器、小皿」とされている。また、各部門に共通する条件として「日用品を主体とし、都会向きな、いわゆるスッキリした図案であること」と規定されている。「独創的なものを歓迎する」とあり、審査は島田東京美術学校教授が行うこと、賞金は百円で優秀図案に配分すること、応募資格は研究会会員および県内在住の工芸作家と一般の人々であることなどが記載されている。審査を務めた島田佳矣（しまだよしなり）は金沢出身で、明治 35 年から昭和 7 年まで東京美術学校（現在の東京藝術大学）図案科教授を務めた人物であり、研究会の顧問でもあった。「都会向きのスッキリした図案」という条件は、言い換えれば、東京美術学校でも評価される図案であるといえる。

5ページ目

会報5ページ目には「編集室より」と「展覧会便り」が掲載されている。「展覧会便り」には、東京三越呉服店で開かれた全国窯業品共進会や、石川県商品陳列所での染色作品展覧会など、当時の展示情報が紹介されている。

「編集室より」では、編集担当者が金沢市意匠図案研究会を「誕生し、ほどなくして学校に入学した子ども」に見立て、「愉快に登校して活発に勉強してこそ将来の国家も成立する。もちろんそのためには良い教師も必要とする」「過去の有数の作家は非常に多くの研究と努力によるもので、決して突発的に名を成した訳ではない」と記して、会員の研究と努力を促している。

さらに「工芸はただ多くの手数と材料によってその真価が定められるものではなく、洗練された形の美しさと、その形に調和する意匠の力によって、人を満足させるものである」と述べ、陶磁器・漆器・金属・染色・木工における造形そのもの美しさと調和する意匠の重要性を強調している。例として挙げられた「大聖寺の故名工山田長三郎氏」は、鉄打出の精巧な作品で知られる山田宗美のことであり、宗美も制作にあたって識者の意見を取り入れていたという点を参考にすべきと提案している。

文章の最後では、「本会主催者および幹事は、会員数の多さを重視せず、真剣な2、3名だけであっても研究会を開催するはずである。主催者の情熱に会員も応えるべきだろう」「皆の体験と研究の成果は大いに公開して、互いに知識を向上させよう」と呼びかけて締めくくられている。

この呼びかけがどのような成果をもたらしたかは明らかではないが、研究会の発足から8年後の昭和8年には金沢市意匠図案研究会第 1 回作品展が開催されている。これは研究会の活動が一定の成果を上げたことを示すものであり、この作品展はのちに金沢市創作工芸展と名称を変更し、現在の金沢市工芸展へと受け継がれている。

（金沢市立中村記念美術館 学芸員　齋藤直子）